

# 7月の肥培管理

■ 1回目穂肥は的確に、2回目は確実に ■

## 1. 水稻の生育ステージ

6月に入り、梅雨らしい天候が続いています。又、近年この時期、集中豪雨的な降雨が見受けられますので、今後の水管理に充分注意が必要です。

ハナエチゼンにつきましては、6月26日頃、コシヒカリについては7月15日頃、日本晴については7月18日頃に幼穂形成期を迎えますので、良食味米生産に向けた肥培管理をお願いします。

## 2. 中干し □ 幼穂形成期直前まで □

中干しで稲体の健全化を図り、収穫直前までの間断通水を可能とすることが、品質向上（乳白や胴割粒の発生を抑制）につながります。

又、中干しは無効分げつを抑制し、下方向への根の伸張を促進するため必要な作業であることを再認識して、適期に実施してください。



移植：この状態中干し

□ 移植コシの場合 □

1株の茎数は見た目よりも多くなっています。  
左の株の状態では18本/株になります。



直播：この状態中干し

□ 直播コシの場合 □

条播の場合、6月中旬以降急激に茎数が増えてきます。  
左の分げつ状態で100本/m程度。

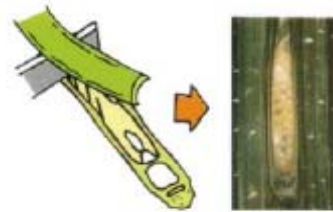
## 3. コシヒカリの穂肥 □ 幼穂長と生育を確認して適切な穂肥を □

穂肥は適正な着粒数と登熟向上に向け、必ず幼穂長と圃場ごとの生育（草丈・葉色・茎数）を確認し適期に適量を施すことが極めて大切です。

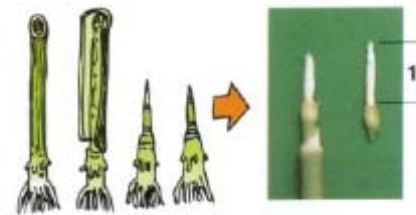


### 1回目の適期診断

#### 幼穂の確認方法



ア. 親長茎と次に長い茎の地際をナイフで縦に切る



イ. 親長茎と次に長い茎の葉節を1枚ずつはく

幼穂長	出穂前
0.2 mm	30日
2 mm	22日
10 mm	18日
50 mm	14日
100 mm	10日

施用時期が早いと、1つの穂につく粒数が増加しますが、稈が伸び、止葉が長く、倒伏しやすくなり、結果として登熟が悪くなります。逆に、遅いと、穂につく粒数に不足をきたし、精米中の蛋白含有量が高くなり、食味を低下させる原因となりますので、1回目の穂肥は時期を的確に施しましょう。

近年温暖化している気候の中、8月上旬の出穂期に葉色が非常に淡くなっている（夏場の稲体の活力が低下している）ことも胴割れ米の発生要因と考えられるため、暑い夏場を乗り切るために2回目の穂肥は確実に実施しましょう。

#### 4. コシヒカリの稲の姿（幼穂形成期時） 穂肥を決めるポイント

生育	草丈	葉色	茎数
適正	82 cm未満	3.5	24本/株程度
やや過剰	82 cm以上	やや濃い	25~27本/株
過剰	82 cm以上	濃い	28本/株以上



#### 5. 穂肥時期・量の目安 こだわり追肥 570 施用量

品種	1回目		2回目	
	時期	10ア施用量	時期	10ア施用量
ハナエチゼン	幼穂長 1~2 mm (6月26日頃)	適正 15 kg	1回目の10日後 (7月6日頃)	適正 15 kg
		やや過剰 12 kg		やや過剰 12 kg
<u>コシヒカリ</u>	<u>幼穂長 10 mm</u> (7月19日頃)	適正 12~15 kg	<u>1回目の7日後</u> (7月26日頃)	適正 12~15 kg
		やや過剰 10 kg		やや過剰 10 kg
		過剰 -		過剰 10 kg
日本晴	幼穂長 1~2 mm (7月18日頃)	適正 15 kg	1回目の10日後 (7月28日頃)	適正 15 kg
		やや過剰 12 kg		やや過剰 12 kg



※施用量は4 コシヒカリの稲の姿を参考にしてください。

#### 6. 基肥一発肥料の対応 間断通水で肥効の発現を

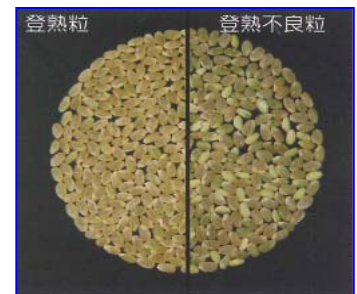
原則、穂肥の必要はありませんが、一発肥料でも前年が転作などの理由で基肥を減らしている場合は、穂肥窒素量が不足するので、不足分に換算した穂肥を施すようにしてください。又、2回目の穂肥時期となっても葉色が淡いまま登熟不良を招くと予測される場合、こだわり追肥 570 を7kg/1.0ア程度、2回目の穂肥に相当する時期に追肥しましょう。

#### 7. 食味向上のために けい酸質資材の施用で登熟向上

けい酸や加里は生育中盤における軟弱徒長や病害を抑えるだけでなく、出穂期以降の日照不足、低温などによる登熟低下を軽減する効果があります。けい酸質資材を積極的に投入し、稲の一生に必要な不足養分を補いましょう。



資材名（いずれか）	散布量	散布時期
けい酸加里 (けい酸 30% 加里 20%)	20kg/10 a	コシヒカリの場合 6月下旬~ 7月上旬
粒状ようりん (けい酸 20% 磷酸 20%)	40kg/10 a	



#### 8. 病害防除

いもち病対策として、移植については苗箱施薬としてスタウトダントツ粒剤が使用されています。移植でも箱施薬していない場合や、直播の場合はオリゼメート粒剤を早急に散布しましょう。また、昨年紋枯れ病の発生が多かった圃場では、リンバー粒剤を7月上旬から中旬に散布してください。



(特別栽培の場合は使用できるか確認してから散布を行うようにしましょう)